山陰の弥生都市
出雲東部地域の非農耕的な大型集落

A Yayoi Urban Center in San'in :
A Large Non-Agricultural Settlement in Eastern Izumo

広瀬和雄

HIROSE Kazuo

❶塩津丘陵遺跡群の景観
❷塩津丘陵遺跡群の特質
❸経済的センター－生産・交易拠点－としての大型集落
❹計画的に建物群が配置された大型集落
❺弥生都市としての塩津丘陵遺跡群
❻おわりに

［論文要旨］

中海の航行へのビジュアル性を意識した塩津丘陵遺跡群からは，弥生時代後期末の一大建物群が見つかっている。そこでは首長居宅と思われる布掘建物，各種製品を保管した高床倉庫群，手工業生産の「工房」，住まいである竪穴住居など，性格の異なった建物群が計画的に配置されていた。とくに，丘陵頂部の布掘建物を囲んで建設さ れた30棟以上の高床倉庫群（一時期には10数棟）や，ひな壇状につくられた70以上の加工段群―17ヶ所から工具・未製品や炉壁・鍛造剥片などが出土―は，通常の農耕集落ではとうてい見られない。ここでは，少なくとも鉄器の鍛造や碧玉製品の製作があったが，予測される生産量の多さから，製品が広域に供給されたのはまず間違いない。そして，それらが交換された手工業製品の一大生産・交易センターだったのも動かない。

周囲には水田稲作に適した平野はないし，隣接した丘陵には同時期の一大首長墓群―出雲東部～伯耆西部地域の集団的帰属意識を象徴する観念的・宗教的センター―が築造されている。加えて，短期間の開始と廃絶などからすれば，この非農耕集落の成立には荒島墳墓群に結集した広域首長層の政治意志が働いたとみたほうが理解しやすい。私は＜政治的･経済的･宗教的センター機能が一ヶ所に集められ，それらを担った人びとが集住した場＞を都市と概念づけるが，ほかの弥生都市にくらべると存続期間は短いものの，塩津丘陵遺跡群はまさにそれに該当する。

【キーワード】布掘建物，高床倉庫，加工段，手工業生産，非農耕集落，弥生都市

❶……塩津丘陵遺跡群の景観

島根県安来市塩津丘陵遺跡群は，中海に流れ込む飯梨川が形づくった沖積平野に伸びる，丘陵の尾根から斜面にかけて展開している(図1)。発掘調査で検出された，弥生時代後期後半～後期末の一大建物群をはじめとした「遺構や遺物は，従来島根県内で検出されてきた弥生時代の集落関連遺跡のどこよりも多く，また内容も豊富といえる」もので，一見しても非日常的な色彩を漂わせるものであった。つまり，この時代の一般的な集落遺跡，その多くが農耕集落とみなされているものとは，かけ離れた内容をもっていた。まず，発掘調査報告書にしたがって，その概要を

図1　塩津丘陵遺跡群の位置

みてみよう［丹羽野・梅木・守岡編 1998。①～③の括弧内は報文からの引用］。

この遺跡の性格を判断するために重要な事実が二，三ある。

第一。この遺跡群の北，西，南側の三方には丘陵地帯が連綿とつづいていて，それらを刻んだいくつかの小さな谷を除くと，まとまった平地はまったく見られない。水田稲作とのかかわりで言うと，狭隘な谷水田ができるかどうか，といった程度である。唯一，東方にだけ平野が開けている。しかし，そこに広がっている「三角州の大部分は，近世以降のたたら製鉄に伴う鉄穴流しによる莫大な土砂流失によるところが大きく，古代においては現中海が現在の平野内にかなり湾入していた可能性が高い」。つまり，飯梨川河口部の沖積平野の多くは，「近世たたら」にともなって流されてきた土砂で形成されたのであって，弥生時代の平野面積は現在よりもかなり狭くなることは動かしがたい。さらに，そこは飯梨川の水流が海に注ぎ込む氾濫原だから，河川そのものはとうてい制御できなかった弥生時代には，水田耕作に不向きな土地以外のなにものでもなかった。

第二。塩津丘陵の北側には小さな開析谷があるが，その北縁部に営まれた岩屋遺跡（図 2）が注目される。ここでは「弥生時代終わりから古墳時代初めにかけての波打ち際が検出され，少なくとも塩津丘陵遺跡群の北の谷は，当時は水面が入り込んでいた」ことが判明している。弥生時代の海岸線の発見という，きわめて希少な発掘調査例だが，それによって塩津丘陵遺跡群の北側は穏やかな入り江状態になっていたことが，きわめて高い確率で予想される。いまのところまだ見つかってはいないが，将来的には弥生時代の舟着き場（港津）の検出が期待される場所である。

第三。塩津丘陵遺跡群の所在する安来平野北西縁の丘陵一帯は，東西約 2km，南北約 1.5km のごくかぎられた範囲に，四隅突出型墳墓に代表される弥生時代後期の墳墓群が集中している。塩津山墳墓群，安養寺墳墓群，宮山墳墓群，仲仙寺墳墓群，下山墳墓などがそうで，荒島墳墓群と総称されるものである。つまり，出雲東部地域，もしくは伯耆地域の一部にまでおよぶ広い範囲に，分散居住していた複数の首長たちが，この地の丘陵上に一大共同墓域を営んだというのである（図 2）。おなじく出雲地域西部には，大型四隅突出型墳墓の出雲市西谷 3 号墓で知られている西谷墳墓群があって，これらふたつの墳墓群は東西に二分された出雲地域の首長層の政治的結集を表わしているようだ。

注意をひくのが，この荒島墳墓群のまっただなかに，塩津丘陵遺跡群が位置していることである。広域におよぶ首長層が築造した一大墳墓群の一角に，後述するような手工業生産とその生活拠点を設けるという，すこぶる興味深い事実が見られるのである。この一点だけをとりあげても，塩津丘陵遺跡群が通常の集落とは一風異なった性格をもっていたに違いない，非日常的な要因をおびていた可能性がつよい，そういった推測や期待をもたせるのである。

第一，二の事実からみれば現在，塩津丘陵遺跡群の北東方にひろがる飯梨川河口域の平野のほとんどは，弥生時代には存在していなかった蓋然性が高い。したがって，「塩津丘陵遺跡群が湖面に（もしくは海面）に岬状に突き出していた可能性」はきわめて大きい。それは荒島墳墓群も同様である。それらも，ことごとく鳥嘴状に海に向かって飛び出した丘陵上につくられていた。いいかえれば，弥生時代後期に営まれた塩津丘陵遺跡群と四隅突出型墳墓からなる一大弥生墳墓群は，中海を航行している舟からもっともよく見える地点に，意図的かつ計画的につくられたということになる。

図2　荒島墳墓群と岩屋遺跡の位置

それはほぼ動かない。想像力を働かせれば，出雲地域の東部と西部の間に，さらにはもっと広い地域に，恒常的に設定されていたであろう交通ルート，それを睥睨するような空間を占地していたのである。

そうした事象，つまり弥生墳墓が帯びるビジュアル性は，西日本を中心とした首長墓が，弥生時代後期ごろからもちはじめる特性のひとつでもある。おなじく四隅突出型墳墓の出雲西部弥生墳墓群をはじめとして，方形墳墓をつくりだした丹後・但馬地域や越前・越中地域などの日本海側のみならず，特殊器台・特殊壺を墳頂に樹立した双方中円型墳墓や方形墳墓などの吉備地域，

方形や前方後円形の墳墓を分布させた讃岐地域，あるいは円形墳墓などをつくった播磨地域といった瀬戸内地域でも，同様の事態が展開している。それらがもった可視性にはつぎの２類型ある。Ａ類型はみずからの統治領域，いいかえれば生活域や生産域を見下ろす，あるいはそこから見上げる低丘陵などに立地する場合である。多くの弥生墳墓がそれに該当する。Ｂ類型は，たとえば丹後地域の「王墓」，赤坂今井墳墓や大風呂南１号墓のように，墳墓の周辺には生産基盤となる平野はほとんどなく，あたかも交通の要衝に面しているかのような立地を採用するものである。ただ，どちらにも共通しているのは，見る／見せる墳墓という特性である。

出雲東部地域の荒島墳墓群が，Ｂ類型に属する―中海という交通の要衝に面する―のは言うまでもない。しかしながら，それと密接な関係をもって展開したであろう大型集落までもが，ビジュアル重視という様相の一翼をになう事例は，さほどないように思われる。ここにも塩津丘陵遺跡群の大きな特性がある。

❷……塩津丘陵遺跡群の特質

塩津丘陵遺跡群を特徴づけるのは多数掘り出された竪穴住居や掘立柱建物だが，それらは「弥生時代後期後半～後期末」を５期区分したなかの「5期」に集中している（図3）。したがって，ごく短期のうちに―炭素14年代法などによる実年代の算定はこれからの課題だが，既往の年代観から推測すると二，三十年ほどであろうか―多数の建物が，丘陵の尾根から斜面にかけて営まれていたことになる。

建物群は垂直的，かつ平面的に偏った，そしてきわめて特徴的な分布傾向をみせている（図3，4，8）。まず，丘陵最高所の標高約50ｍの尾根平坦面には，布掘建物が建てられていた。そ

図3　塩津丘陵遺跡群ー 5期の建物群

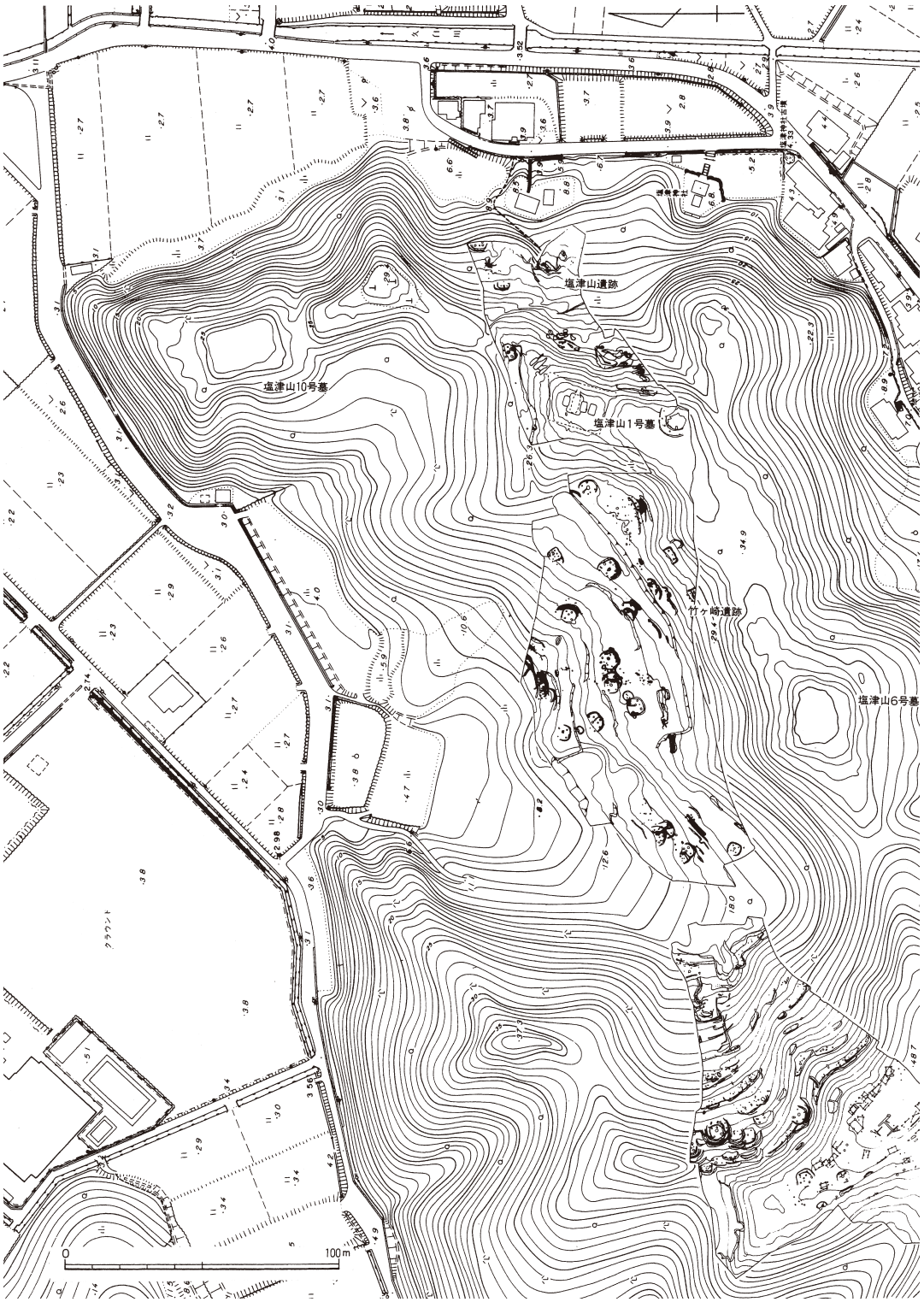


図4　塩津丘陵遺跡群全体図

れらには4回の建て替えが認められたから，それぞれの建物はおそらく10年未満という，きわめて短い期間しか存続しなかったようだ。そのなかのSB01の床面積は26.8㎡，おなじくSB02は25.85㎡と，つぎに述べる掘立柱建物にくらべると大きいものの，けっして傑出した規模をもつわけではない。そうはいっても，もっとも見晴らしのいい地点に建てられた，特殊な構造の掘立柱建物という特徴からは，これらが何か特別の役割をもっていたとの推定をもたらす。

次に，布掘建物を囲むように，それから一段下がったところに，梁間1間×桁行2間，梁間1間×桁行1間といった小型の掘立柱建物が，じつに30棟以上もの多数，集中して建てられていた。その構造と規模からして，これらのほとんどは高床倉庫だろうと推定しうるが，弥生時代の中・後期の集落遺跡でこれだけの高床倉庫が集中しているところは，佐賀県吉野ケ里遺跡や愛媛県文京遺跡ぐらいしかわかっていない。

「頂上平坦面周辺の建物群は，中心的建物である中央の布掘建物の建て替えに連動して変動している可能性が」あって,「同時に10棟前後」が建てられていたとみなされている。したがって,「11～12棟の建物が頂上部だけで存在していた」ことになるが，それらは塩津丘陵遺跡群のなかでも「最高所の最も目立つところに，なんらかの区画を設けたうえで，集中的にかつ規則正しく配置」されていたようである。ただ，丘陵尾根の平坦面は南東部にもっとひろがっているので，もう少し存在していた可能性がある。

ついで，これら掘立柱建物群より下方の丘陵斜面には,「上方側を掘り込んで平坦面を作り出した」「70をこえる弥生時代後期後半～後期末の加工段」が，ひな壇状に密集した状態で多数つくられている。それらはⅢ類に分類されている。「Ⅰ類加工段の一部は高床倉庫を建てるために作り出された遺構」と考えられている。そうであれば，高床倉庫の数はさらに増える。いっぽう,「Ⅱ類加工段は作業場としての機能を持つものがかなりある」し,「Ⅲ類加工段」は「工房」や「広場や通路」や「露天状態の物置」などの多様な機能が推定されている。

❸……経済的センター－生産・交易拠点－としての大型集落

注目されるのが，17ヶ所の加工段から「工具(例えば鉄斧，ヤリガンナ，石斧転用石製品，叩石，砥石など）や未製品(擦切石製品，研磨石製品など)，製品製造過程で生じる残片(鍛造剥片，鉄滓，鉄片，碧玉片など)」が，炉壁・鍛造剥片や水晶製未製品などとともに出土している事実である(図5，6，7)。つまり，ここで鉄製品の鍛造―無頸式鉄鏃，鉄斧，鉄鎌，刀子，鉄錐などの製品が出土している―や,水晶製品・碧玉製品などの製作が実施されていた。多くの加工段が「工房」であったのは確実なのである。しかも，丘陵斜面という立地条件からすれば，上記したような遺物の残存条件の確率はさほど高いとは思えないから，本来はもっと多くの「工房」が機能していたのは想像に難くない。

同時操業の数を確定しなければならないけれども，高床倉庫群と同様に，これだけの工房がごく限られた空間で見つかったのは希少例である。5期には多数の「工房」を含む加工段は「20以上」あった。さらに，当然のことながら未調査区にも拡がっていたであろうから，これもいま以上に大幅な増加が予想されそうだ。そうすると，最盛期には20基ぐらいの「工房」で製作された鉄製

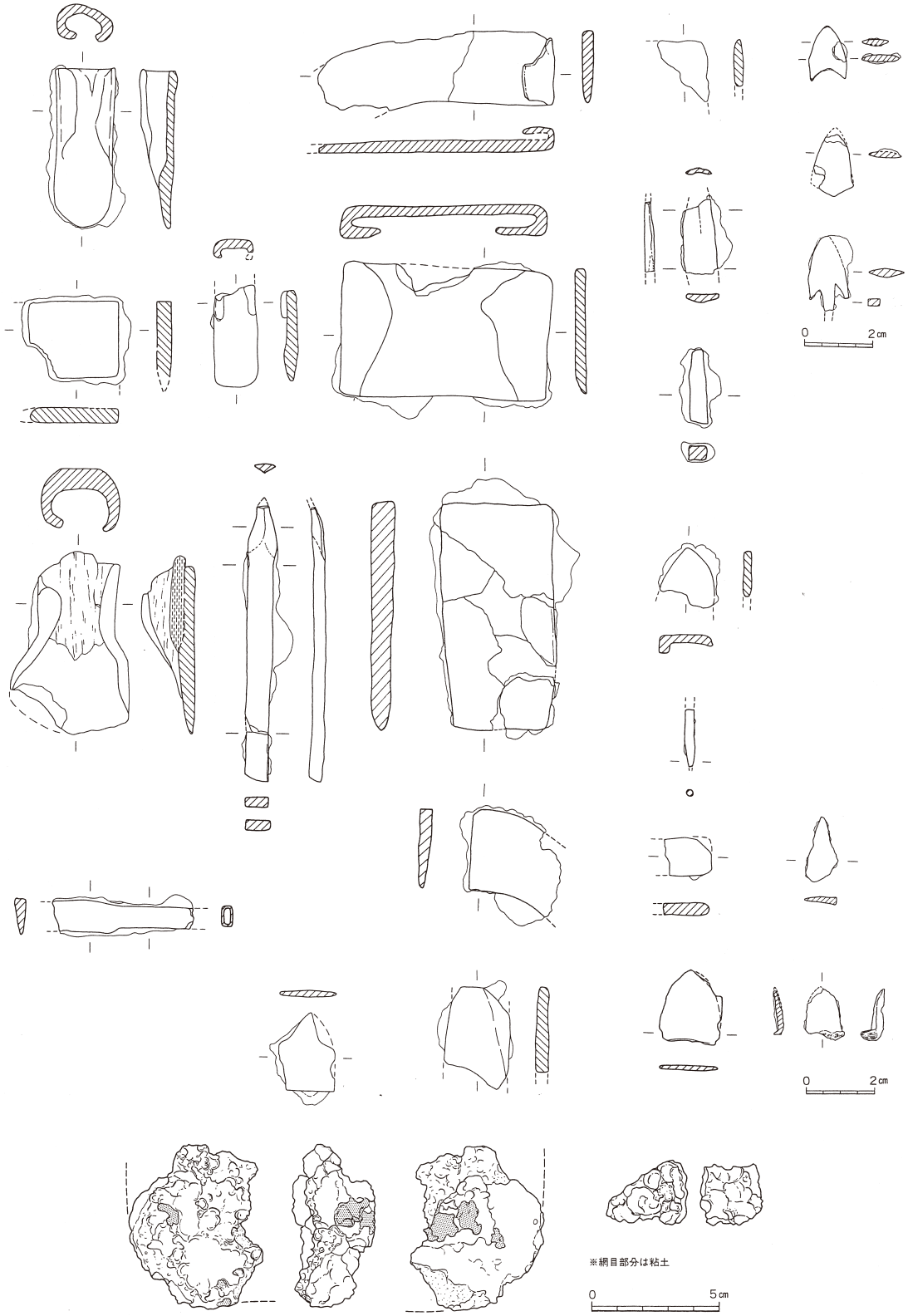
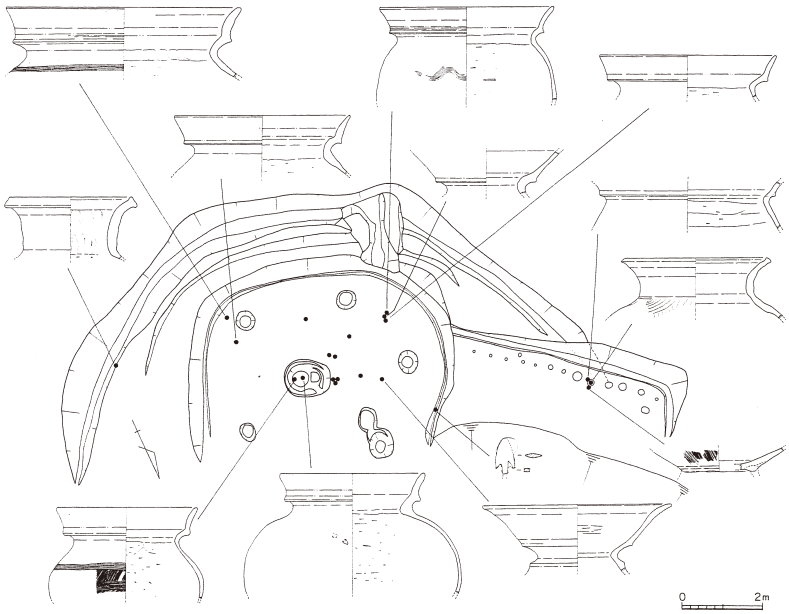
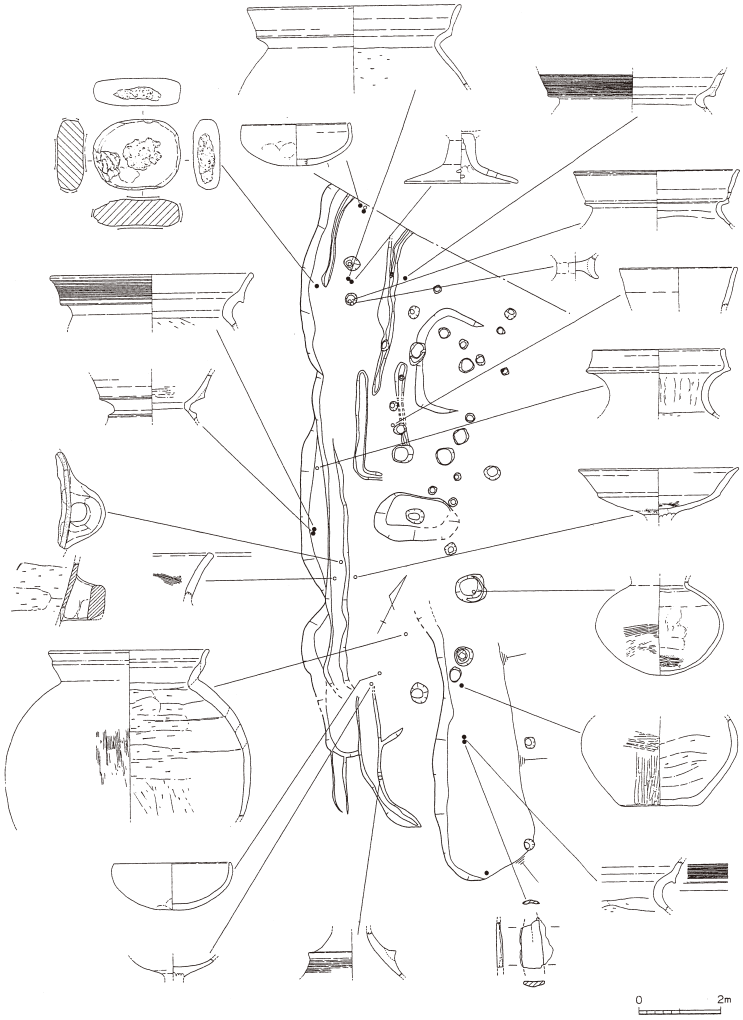


図5　塩津丘陵遺跡群出土鉄器

図6　塩津丘陵遺跡群出土碧玉・剝片・砥石・叩石



柳遺跡 S105
遺物出土状況



柳遺跡加工段 32・33・
34・35・36 遺物出土状況

図7　塩津丘陵遺跡群の鉄器等の出土状況

品や玉製品が，「10 棟前後」の高床倉庫のなかに保管されていた，という事態が演繹されても大過はないように思われる。

布掘建物や高床倉庫群が密集していた箇所から，小さな谷を隔てた東方の丘陵尾根には塩津 1 号墓，6 号墓，10 号墓などの弥生時代後期の首長墓，四隅突出型墳墓が造営されている。注意をひくのは，5 期にはこの「首長墓域の斜面に突如竪穴住居を中心に集落が展開する」事実である。すなわち，「弥生時代後期後半～後期末の竪穴住居跡が 40 棟」検出されているが，やはり「塩津 5 期のものが圧倒的に多い」。25 棟以上の竪穴住居がそれに該当するが，そのうちの「15 棟前後の竪穴住居が同時に存在していた」ようで，「4 ～ 5 つの単位集団」の存在が想定されている。そして，これらのなかには竹ヶ崎遺跡 SI03，04，05，11，13，17 などや，柳遺跡 SI05，08 などのように，碧玉小片や緑色凝灰岩未製品や砥石やタガネ状石器などを出土するものがあるから，碧玉製品や鉄製品などの製作「工房」も含まれている。

ちなみに，これも当然のことながら　未調査区にもひろがっているはずなので，5 期には数十棟の同時併存を想定したほうが，実態に近いのではないか。鉄器製作や玉製作に従事した工人集団や，高床倉庫を管理した人びとが多数居住していたのであろうか。ちなみに，「集落と墳丘墓の展開は同時平行」だが，6 号墓や 10 号墓は長辺が 40 m を超えるこの地区最大の四隅突出型墳墓である。布掘建物に住まいしていたのが，この地域の首長だとしても，彼らがそうした大型墳墓を築造したかどうかは，いまのところは判断しがたい。ただ，両者の距離的，地形的な親縁性からすれば，そうであってもさほどの違和感はなさそうだ。

以上のように，塩津丘陵遺跡群は「東側の丘陵域は首長墓域，西側の丘陵（柳遺跡）上半は高床倉庫を初めとする建物域という区別」がなされていた。そして，「西側丘陵（柳遺跡）に配されたのは，一般の生活とはかかわりの薄い，どちらかというと集団なり，首長なりのステイタスを象徴的に表現できる建物であった。いわば，「聖域」的な部分を一般の集落から切り放して集中的にこの地に配した」とみなしうるものだ。いいかえれば，布掘建物，高床倉庫，「工房」，竪穴住居などの性格の異なった建物群が二つの丘陵にまたがって，そして同一丘陵のなかでも，それぞれ計画的に配置されていたという，きわめて興味深い集落構造を呈していたのである。

さらに，「それまで調査範囲外にあった居住域が，大挙移動してきたとしか思えない竪穴住居の急増」を見た 5 期であるが，そのひとつの原因には 4 ～ 5 期に「安来平野周辺が緊張状態に置かれていた」ことが想定されている。「谷底から上方に上がっていく道」に 40 個体以上の「祭祀的な」土器が―約半数が外来系―置かれていたことから，「集落の廃絶に伴う祭祀の一端が地元の住人ではなく，外来の人あるいは外来系の人たちが主体となって行われ」，しかも「自然消滅的なものでなく，劇的に引き起こされた可能性が高い」と，丹羽野裕氏は述べている。いずれにせよ，この集落の「劇的」な出現と廃絶には，そこに結集した人びととだけでなく，それを超える大きな力が働いたような雰囲気が漂っている。

❹……計画的に建物群が配置された大型集落

大型集落の塩津丘陵遺跡群は，非農耕的な色彩のつよい立地条件をとっている。丘陵などでの

畠作の可能性を除くと，周辺には一部の谷水田の可能な狭い谷のほかには，水田稲作の余地はほとんど存在しない。したがって，弥生時代に一般的な農耕集落としての性格を，この大型集落に付与することにはかなりの無理がある，と言えそうだ。そこで手工業生産が広範に実施されていた事実からすれば，むしろ非農耕集落としての性格を考えたほうがふさわしい。

塩津丘陵での手工業生産は鍛冶炉などの遺構や，工具や生産残滓などの遺物でわかっているのでは，鉄器の鍛造や玉つくりが確実なものである。すなわち，原材料の鉄素材や碧玉原石（花仙山産原石など）や水晶原石が他所から運ばれてきて，この地で各種製品に加工されたわけである。ごく短期間のうちに，20ヶ所程度の製作工房があった―もっとも工房的役割をもった竪穴「住居」も含めればもっと多くなるが，同時併存の数は厳密にはわからない―のだから，ここで製作された鉄製品や各種の玉が，この丘陵で生活していた人びとだけの自家消費のためでなかったのは，容易に了解されるであろう。大量に生産された鉄器や玉の製品がいったいどこへ運ばれたのかという重要な問いは，今後の課題とせざるをえないが，この場所が他所への供給を目的にした一大生産センターであったのは動かない。

手工業生産の拠点であるという事実と不即不離の関係をもった，この遺跡群のもうひとつの大きな特徴は，掘立柱建物の高床倉庫群の存在である。10棟前後が同時に建っていたし，倉庫に関連しそうな加工段もあわせると，もっと数の多い一大倉庫群が存在していたようだ。つまり，ここで製作された多量の製品が，そのつど外部に持ちはこばれたというわけではなく，倉庫群に一定期間保管され，出雲地域や伯耆地域などの各所に適宜，計画的に分配されたことが推測される。その場合，それらが無条件で不特定多数の人びとに無償配布されたとは考えがたいから，なにがしかの物品との交易がここで実施されたことであろう。交通の要衝としての立地からすればその可能性が強いのだが，もしそうであれば，この地は交易の拠点でもあったということになる。

鉄器製作のためには朝鮮半島などから鉄素材を獲得しなければならない。碧玉や水晶の原石もそうだが，そのため必要になる原資―なにかはわかっていないが―も，倉庫群に保管されていたことだろう。さらには，周辺にまとまった可耕地がない事実からすると，鉄器製作工人や玉つくり工人たちが日々消費する，米や塩をはじめとした食料一式も，個々の竪穴住居以外に，この倉庫群の一角でも保管されていたのであろう。すなわち，原料が運ばれ，それを加工して製品に仕上げ，他所と交易するという一連の営為が一定期間，この場所で実施されていたと想定されるわけだ。

ここで考えておきたいのは，生産に携わった工人集団の生産システムである。彼らがどれほどの専業度をもっていたかはよくわからない。しかし，フルタイムの手工業生産であれば，前述のように周辺には可耕地がほとんど認めがたいから半農半工，いいかえれば農工未分離の状態は成立しがたい。家族もふくめた工人集団が生活するための食料だけでなく，土器や木製品などの生活容器，衣類などの布・皮製品，そういった生活物資が日常的・恒常的に，かつ安定的に供給されなければならないと，継続的な生産はなされにくい。もし，農閑期だけのパートタイム生産（季節的な専業）があったとするならば，工人集団はどこか別の場所に農耕地をもっていて，そこで生産された食料生産物をこの丘陵に運んできて，おもに冬から春にかけての農閑期に手工業生産に従事したことになる。それにしてもいったい誰の意志にもとづいて，一ヶ所にあつまって農閑

期だけの鉄器製作や玉製作に携わったのであろうか。

フルタイムにせよ，パートタイムにせよ，複数の手工業生産やそこでつくられた製品の分配（交易）などが，個々の「工房」単位でばらばらに，いわば無秩序かつ無機的におこなわれたはずはないだろう。もしそうであれば，かならずしも生活に適したとはみなしがたい丘陵斜面の一ヶ所に，集住しながら生産する―それが利便性に富むとはとうてい思えない―必然性はまったく認めがたい。また，生産された鉄器や玉などは一定期間，倉庫群に保管され交易に供せられたのであろうが，そのためには交換レートを決定し，それにもとづいて持ちこまれた何かと交易するための「商人」的な職掌が必要になってくる。つまり，塩津丘陵は流通センターの役割も果たしていたのであるが，それを推進していくシステムも問題となってくる。

上述したような諸営為に携わっていた人びとは，いったいどれほどいたのであろうか。かなりの難問ではある。そして，既往の集落論では避けられてきた問いではある。しかし，非農耕集落としての塩津遺跡群の特質を規定するために，おもに遺構のありかたをとおして「5期」の人口を推算してみよう。

「工房」は作業場としての加工段に，その機能も持っていた数棟の竪穴「住居」を加えると，一時期にはおそらく20以上はあったようだから，もし一ヶ所の加工段で3～4人が仕事に携わっていたとみなすと，合計60～80人以上の人びとが鉄器加工や玉つくりの手工業生産に従事していた計算になる。それぞれの工人が5人程度（竪穴住居1棟に居住できる人数とみて）の世帯をもっていたと仮定するならば，300～400人以上の人びとが集住していた計算になる。ただ，一個の世帯から2人の工人が出ていたと計算するならば，人口は半分に減少して150～200人程度になってしまう。

つぎに，ここで生産された鉄・碧玉製品・水晶製品の，交易に従事していた人びとがどれほど含まれていたかについては，まったく手がかりはない。そうはいっても，少なくとも5人や10人ぐらいはいたであろう。そして，工人集団などの食料や什器や衣料その他の生活物資の入手にかかわった人びとも，これも根拠はないけれども同数ほどいたのではないかと推定しておきたい。そられの人びとが各々世帯をもっていたとみなせば，50～100人程度の人員をみることができるであろう。

さらには，最高所に住まいしたのが首長だとすると，その近親者も少しはいたであろうし，それらの警護にあたった「近衛兵」のような存在も相当数いたであろう。また，手工業生産の調整や，生産された製品やその交易の管理などに従事した人びとも少数かもしれないが，存在していたことであろう。倉庫群の管理や警護にあたった人びとや，首長一族などもあわせると，そして未調査区も考慮に入れれば，多く積算すれば400～500人ほど，少なく見ても200～300人ぐらいの人口を，見積っても大過はないように思える。

いっぽう，「5期」における竪穴住居の同時併存は15棟以上が認定されているが，一棟に5人程度が居住していたとしても75人しか数えられない。しかし，上記の計算に依拠すれば，掘立柱建物を除いても人口積算の多いほうだとあと60～80棟ほど，少ないほうでもあと20～40棟ほど，各々同時併存の竪穴住居が未調査区にはまだ埋まっている計算になる。

生産と流通（交易）の一大拠点，経済センターとしての役割を担ったであろう塩津丘陵遺跡群の

もうひとつの特徴は，布掘建物，梁間1間の高床倉庫に措定される掘立柱建物，三類型の加工段（にあったであろう簡易な工房），工人集団などの住まいと見られる竪穴建物など，多彩な構造をもった建物群が垂直的かつ平面的に偏在していた事実にある。それらがあいまって形づくった整然とした集落景観も，中海に突きだしたかのような立地環境とあいまって，この時期の一般的な農耕集落―同質的な様相が支配的な景観―とはかなり際だった差異をしめしていたことであろう。

先述したとおり，丘陵最高所の眺望に最も優れた場所に布掘建物が位置し，その周囲を掘立柱建物の倉庫群がとりまき，さらにそれらの下方斜面には工房群などが建てられていた。特殊な堀形の布掘建物は壁立建物の可能性も否定はできないが，それに加えて最高所という立地条件もあって，宗教的な性格なども考慮に入れたほうがいいかもしれない。しかし，ここではひとまず，多数の工房や倉庫群を掌握していた首長の居宅とみなしておく。もしそうだとすれば，西側丘陵には統治者の住まいに加えて，製作工房や倉庫群という生産や交易にかかわる建物群が，最高所から下方にかけて垂直分布をしめしながら，建てられていたことになる（図8）。

こうした建物群の東側には，当時は入り江になっていた小さな谷が刻まれているのだが，その谷口部付近が港津であった蓋然性が高い。塩津丘陵遺跡群の立地からして，鉄器や玉などの生産物は当然，舟で各地へ運搬されたことだろう。この一見，特殊な集落立地は，活発な水運があった事情を物語っているのである。いっぽう，その谷を隔てた東方丘陵一帯の斜面には，工人などが生活するための竪穴住居群が展開していた。つまり，生産・管理ゾーンと生活ゾーンとが棲み分け状態になっていたのである。

手工業生産やその果実の交易が，この丘陵一帯で実施された。ところが，鉄素材や玉原材などの獲得，いつどれだけ製作するかといった各製品の生産調整，つくられた製品の管理と交易などが，それらの製作に携わった個々の工人の判断でまかなわれたとは考えにくい。そもそも，食料生産や生活に不向きなこの丘陵一帯に，手工業生産のために多数の工人らが集住すること自体が，各々の自発的な意志にしたがう行為だという理由が，まったく見あたらない。

個々の工人の意志や欲望を抑えて，彼らを一定の方向に収斂させるための力がないと，このような事態は起こりにくい。自律的な意志にもとづくという意味での「民主的」なシステムを想定しにくいとなれば，首長権力の発動を考えざるを得ない。ちなみに，＜権力＞といえば日本考古学や古代史では，支配・被支配の関係を維持していくための暴力，いいかえれば階級支配のための暴力に等値されがちである。しかし，そうではない。

人間はそれぞれが意志と欲望をもっている。それにもかかわらず，集団で生活せざるを得ない存在である。したがって，個々の人間が無制限にみずからの意志と欲望を主張しあえば，当然のことながらそこでは利害が衝突する。そして，それを放擲しておくと集団（社会）は雲散霧消してしまう。したがって，社会の秩序を維持していくためには，一定の共通意志のもとにしたがわせるための強力が必要になってくる。つまり，利害を調整するために，人びとの意志と行動を制約する力―正当化された暴力―が不可欠になるのだが，それが権力である。つまり，社会が階級的に分裂していようがいまいが，国家が成立していようがいまいが，権力という概念は存在するのである。いわば，人間社会にとっての本質ともいえるものなのである［広瀬 2008］。

それはともかく，四隅突出型墳墓という首長墓が複数集まった共同墓域の一角に生産域を構え

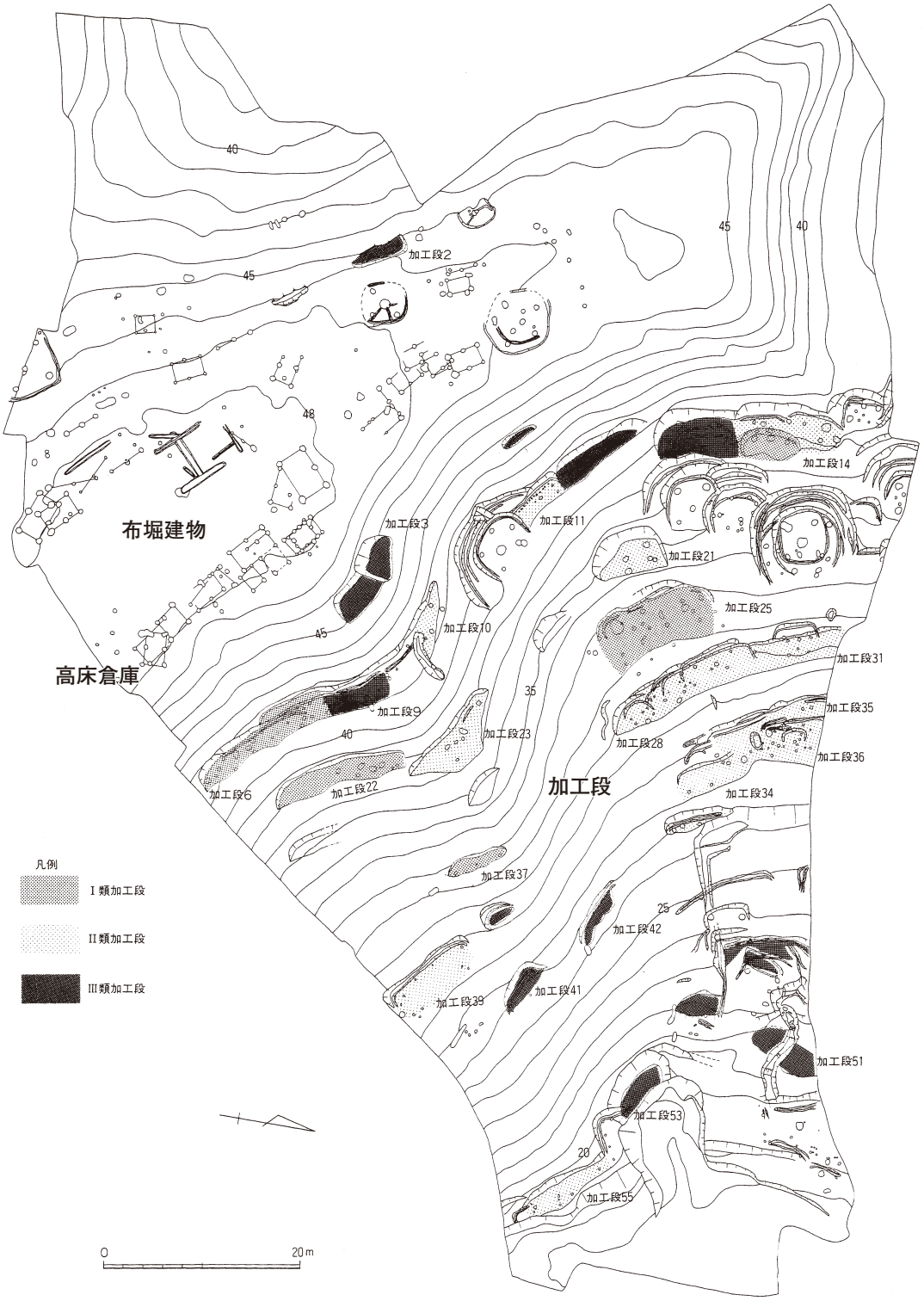


図8　塩津丘陵遺跡群の建物群の垂直分布

ること，それも不特定多数の人びとから見える，可視性に富んだ空間を占地したことの背景をどう考えるか。そこには，出雲地域東部から伯耆地域にかけて形成されていたであろう首長層―荒島墳墓群に結集した複数の首長たち―の共通意志が働いていたとみたほうが理解しやすい。塩津丘陵に設置された一大経済センターを，一個の農耕共同体―模式的には，深さ１ｍ内外の中小河川（灌漑水源）流域を領域とし，首長と農民層で形成された水田を媒介とした運命共同体で，この時期の首長は一基の四隅突出型墳墓を造営していた―の首長が差配したとは，とうていみなしがたい。

さて，普通の生産域や生活域としてはおよそ不適な丘陵，周囲に水田稲作の生産基盤がほとんどないところ，直下が海という場所に，どうして計画的な配置をともなった一大集落が建設されたのであろうか。さらには首長墳墓群とおなじ丘陵，いわば聖なる空間を占地するという背景には，いったいなにがあったのだろうか。

丹羽野裕氏は「丘陵上という一点においても，日常生活には不便で，ましてや倉庫をその頂上に建てる必然性は日常の中には全く見いだすことはできない」し，「これだけの高床倉庫が遺跡群中の最高所に集中して，しかも規則正しく配列する状況」は，「首長ないし集団によって集中的に管理されたことを想起させる」と言う。そのとおりだと思う。そして，「最もよく見え，最も目立つ」「頂上部とその直下付近に林立する倉庫と他の建物類は，東方からこの荒島周辺にやってくる舟からの「見え」を最重点に置いて選地されたのではないだろうか」と正しく指摘している。異議のないところである。

見せる／見える建物群の意義は奈辺にあるのだろうか。中海を航行する，もしくは漁撈などそこで生業を営む人びとに見せる，あるいは近辺の首長層などがたえず生産・交易センターを視認できるようにと，この地が選ばれたのであろうか。もしそうであるならば，塩津丘陵は出雲東部地域や伯耆地域の人びとにとって，集団的帰属意識を象徴する観念的センターの役割を果たしていたのかもしれない。

❺……弥生都市としての塩津丘陵遺跡群

このようにみてくれば，塩津丘陵遺跡群がただの弥生集落―大方では農耕集落が想定されている―でないことは，さほど異論もなく了解されるであろう。普通の集落ではとうていみられない事象をもう一度確認しておけば，つぎの通りである。

第一，倉庫群や首長居宅の存在である。それらは佐賀県吉野ヶ里遺跡や愛媛県文京遺跡などでも認めうる。ことに，弥生時代中期後半から後期前半の文京遺跡では，首長居宅とみなしうる100㎡前後の巨大な掘立柱建物が中核にあって，それに近接して高床倉庫群とみなされる小型の掘立柱建物が多数，建てられていた。普通の農耕集落では認めがたい倉庫群，そこには稲穀などの食糧だけではなくて，武器や武具や威信財，多様な什器類などのほか，手工業生産の製品やそれと交易された製品などが多数保管されていたことであろう。

第二，集住度の高さや異質な人びとの共存である。もちろん，調査範囲が開発予定地にかぎられた「記録保存」のための発掘調査では限界がある。しかしそこで得られた遺構や遺物のありか

たから想定しうる遺跡のひろがりからすれば，少なくみても 200 ～ 300 人に達しようかという人口は，それもコンパクトに集住したその様相は，弥生時代の一般的な集落とはきわめて異質な規模や構造をもつと言わざるをえない。さらに，そこに住まいした人びとには手工業民が圧倒的に多くて，農民の存在はほとんど見受けられない。そして，遺構のありかたから類推すれば，首長や「兵」や「商人」といった非農耕民の共在が想定できる。一般的な農耕集落の構成要員はおおむね農民である，と考えられているのとは決定的な相違点といえようか。

多彩な職掌をもった人びとの集合体という特性は，たとえば奈良県唐古・鍵遺跡や大阪府池上曽根遺跡をはじめとして，弥生時代の大型環濠集落でもみられる特徴である。それらでは複数の手工業生産が実施されていたし，大型神殿などもあって，上記した以外に祭祀を司った祭司もいたことが予想されている。

第三，異質な人びとの共存とつよく関連するのだが，布掘建物，掘立柱建物，加工段などが垂直的分布をみせ，そして谷をはさんだ向かい側の丘陵斜面に竪穴建物が集中的につくられるという多彩な建物形式の計画的配置である。高所における倉庫の集中的な建設などは，それが個々人の使用や管理をはるかに超えていることを如実にしめしている。そして，ふたつの丘陵を占地した人びとが，どこでも任意にみずからの意志で居住地を決めたわけではないのも，簡単に首肯できることである。

第四，弥生時代終末期の「5 期」に，手工業集団を中心として一気に引き起こされた塩津丘陵への集住である。すなわち，どこからかの大量移住に加えて，「劇的に引き起こされた可能性が高い」急激な廃絶と，それにともなう「外来の人あるいは外来系の人たち」［丹羽野・梅木・守田編 1998］がおこなった土器祭祀である。しかも，大量に移住してきた主体が工人集団であること，さらにすこぶる短期間でふたたびどこかへ移動していったこと，それらの意味はどこにあるのであろうか。地域の経済的センターを，中海を航行する内外の人びとに見せる要請があったとしても，そのような要因が弥生時代終末期にどうして生起し，ごく短期のうちに終焉したのであろうか。

第三，四の事象は，個々人を超えた大きな力が働かないと，そしてそれに多数の人びとが従わないと起こりにくい。そもそも集落はどういう契機で成立するのであろうか。考古学的には論証が難しい。なかば「自然発生的」なものも多いであろうが，塩津丘陵遺跡群のような場合は，ここ集住した人びとの自律的かつ内在的な要因によって引き起こされたというよりも，彼らにとっては外在的かつ他律的な要因が，もっと限定的にいうならば首長権力がつよく働いたとみていいのではないか。しかも，手工業生産を中心とした経済的センターの規模から想定される生産量の多さと，複数の首長たちの墳墓群のまっただなかに立地していることからみれば，広域の首長層の意志と強力が執行された結果だと考えたほうが理解しやすい。

ところで，上述してきたいくつかの事象は，いずれも弥生都市を特徴づけるものであった（表 1）。いまのところ独立棟持柱建物（神殿）のような顕著な宗教施設は見あたらないが，首長層の墳墓群である塩津山墳墓群が，その代替的役割を果たした可能性が高い。そうであれば，宗教的センター機能もここに存在したことになる。そして，布掘建物に住まいした首長は塩津丘陵一帯のみならず，手工業生産とその果実の流通によって周辺地域を統治したわけだから，この地が政治的センターであったのも首肯しうる。

表1

	大型「環濠集落」・弥生都市	農民集落
人口	数百人～千数百人？	数十人
職掌	多彩な手工業・漁労・農耕・司祭・渡来人・首長	農耕・漁労・一部手工業
宗教関連	神殿・絵画土器・祭祀遺物	ほとんど存在しない
首長	塀に囲繞された居宅・大型建物・威信財	存在しない
囲繞施設	環濠など	存在しない
備考	異質性・長期性・都市型昆虫。少数(旧国単位に1ヶ所程度)	同質性・短期性。大多数，ごく一般的

＜政治的・経済的・宗教的センター機能が一ヶ所に集められ，それらを担った人びとが集住した場＞を都市と概念づけれれば[広瀬 1998]，これからも考察を深めなければならないものの，塩津丘陵遺跡群をそれに該当させるのはさほど困難ではない。山陰の弥生都市として，位置づけておきたい。

複数の手工業生産とその製品の交易という，広い地域にまたがる経済的再生産システムの運行と，それに付随して各集団（首長）の間に生じた利害の調整，さらにはそれらをふくめた広域の社会秩序の維持が，中海から見える丘陵の地で実行された。つまり，塩津丘陵およびその周辺の丘陵は，生きている大首長―広域におよぶ首長層のなかの代表的首長―に統率され政治的・経済的・宗教的センター機能をもった弥生都市と，死した首長たちが新たな社会的生命を与えられて共同体再生産を保証する墓域，それらで構成されていた。つまり，塩津丘陵は日常的と観念的の，二重の共同体再生産が実行される空間であったわけだ。

ただ，池上曽根遺跡，唐古・鍵遺跡，吉野ケ里遺跡，文京遺跡などのいくつかの弥生都市にくらべると，塩津丘陵遺跡群の存続期間はすこぶる短くて，比較的短期のうちに建設と廃棄がなされている。長期性がそのひとつの属性であった弥生都市のなかでは異例ともいえる。原因はよくわからないが，急激に多数の人びとが集められ，農耕に不向きな丘陵斜面に計画的に集住させ，恒常的に原料や食料などが持ち運ばれ，しばらく鉄器加工や玉つくりなどに従事させてから，一気に解体されたようである。

そのような開始と終焉における事情からみても，個々の工人たちの意志を凌駕したところでの強制力，おそらくは首長層の強制力が作動しないと，そのような現象は理解しにくい。さらに言うならば，各人が一定の目的にしたがって，みずからの意志や欲望を従属させるという共通了解，ことばを換えると権力行使にたいする同意がなければ，塩津丘陵での弥生都市は成立しないし，存続しなかったと考えられる。つまり，政治権力が発動されないと，こうした集団は機能しないのではなかろうか。

都出比呂志氏は「集住した集団の中から首長ともいうべき指導者が現れ，何らかの政治的なリーダーシップを発揮した―中略―都市の重要な構成要素である集住が先行し，集住した過密な人口の集団をコントロールする必要から権力が形成されるという別の側面を重視するなら，都市の形成が権力を生み出すという逆の側面を考慮すべきであろう。我々がいま議論している弥生時代はまさに階級と国家が形成されつつある時代であるからこそ，この点の吟味はきわめて重要なので

ある」［都出 1998］と言う。

しかし，塩津丘陵遺跡群のありかたをみるかぎり，一定以上の人びとの集住をともなう集団形成には，＜はじめに権力ありき＞といった事態が展開していたとみなさないと，諸現象の理解にはいたらないように思われる。弥生都市のなかでも大型環濠集落では，そのような言説が成立しやすい。たとえば，池上曽根遺跡などでわかるように，周囲を囲繞した環濠は弥生時代中期前半の集落成立の当初から大型であって，長期間そのままの状態を保つ。人口が徐々に増えるにしたがって環濠も少しづつ拡張された，というふうにはならないのである。中期中ごろの一度だけ，成立期よりもやや大きめの環濠が再掘削されるだけで，それも廃絶期までつづいている［池上曽根遺跡 20 周年記念事業実行委員会 1996］。すなわち，どれだけの人口かはわからないが，大型環濠集落を建設しようと決めた人びとが，権力とは無縁に自発的かつ「民主的」に，大きな環濠を掘削しようとしたとは，その必然性とともに考えがたいのである。

日本考古学の通説のように，階級支配や国家だけに権力概念を閉じこめてしまうと，少なくとも塩津丘陵遺跡群の解釈には困難がともなう。そうではなく，先述したように権力を概念化したほうが，そして社会の階級化と国家形成と権力とを切り離して，各々を究明していくという視座をもったほうが，弥生時代の社会構造の特質を明らかにしていくためには，いっそう有効だと思う。

❻……おわりに

塩津丘陵遺跡群は弥生時代の非農耕集落であった。首長墓群の荒島墳墓群とともに中海を航行する舟から見える／見せる，そういった立地環境を選択し，すこぶる多数の「工房」や高床倉庫を擁し，垂直的かつ水平的に各種建物群を配した計画的な集落景観をもっていた。そうした諸特徴は，弥生時代後期後半から末ごろの集落としては，「非日常的」な装いと言えるものであった。なかでも，70 ヶ所にもおよぶ加工段のなかの 17 ヶ所に鉄器や碧玉製品の製作痕跡があったり，高床倉庫と思われる 30 棟以上の掘立柱建物が見つかった事実は重要である。ここが自家供給ではない，鉄器と玉を製作した一大手工業センターであったことを十分に首肯させるものである。いいかえれば，塩津丘陵遺跡群は地域社会の核となった分業生産と交易のひとつの拠点を，解明する大きな手がかりを与えてくれる考古資料なのである。

弥生時代の分業生産には，第一に，なかば専業工房的なもの，第二に，弥生都市での多種多彩なもの，第三に，農耕集落で農閑期に実施されるもの，そのような 3 類型があると，かつて述べた［広瀬 1998］。日本列島の弥生社会は，それらがなければ動かない社会であった。いいかえれば，分業生産と交易を必須にした社会であって，なかば通説化しているように，自給自足的な農村で構成される社会ではけっしてなかった。食料でさえもそうではなかったのは，海岸でしか生産されない塩をとってみても明白である。

分業生産は当然ながら交易を前提にしないと実現しない。それには広域と狭域がみられるが，塩津丘陵遺跡群とのかかわりでいえば，鉄素材は遠隔地交易だし，玉の原料は在地的な交易であろう。おそらく，各地で形成されていた地域社会なるものは，そうした広域と狭域の二重の交易で，日常的な存続が保証されていたはずだ。したがって，その実態が解明されないと，近年の考古学

のキーワードと化したかのような＜地域性＞も，実質がともなわないと言われても仕方がない。

もっとも，小稿では山陰地域の弥生集落の動向はいっさい触れられていない。「記録保存」のための発掘調査で蓄積された膨大なデータと，それを基にした多数の研究の成果にも論究できていない。したがって塩津丘陵遺跡群を，それとりまく地域社会の実態にどう位置づけるかという作業は，これからの課題になってくる。ここではともすれば，弥生集落と言えば農耕集落である―それが多いのも事実であるが―，としてやや等質的にとらえられちな近年の研究動向に鑑みて，そういった見方だけでは理解しがたい非農耕的な特性を強くもった塩津丘陵遺跡群の存在に，焦点をあててみたものである。

はたして，農耕社会だけで地域社会は不断に存続できたかどうか。鉄器ひとつとっても，素材の獲得や木炭の生産や高度な技術者の存在などを，実証できる集落遺跡がどれだけあるのであろうか。各種の石器や玉などの威信財，あるいは場所的制約の強い食料なども然りである。上述したような各種の分業生産と製品の交易がなければ，弥生時代の地域社会はなりたたなかった。そして，それらは往々にして一大センターをなしていたことが判明しつつある。この塩津丘陵遺跡群もそうである。ここでは首長居宅とおぼしき布掘建物や10棟ほどが同時併存していた倉庫群があったし，それらに関わる人びとのほかに工人やその家族，あるいは交易に携わった人びとなど，異質な職掌の人びとが多数，共存していた。そして，短期のうちにここへの，そしてここからの大規模な移動がなされていた。建物群の計画的な配置も含めてそうした動きの実現には，当事者を超えた他律的な意志と力の発動があったはずだが，それも非農耕的な特性と言いうるものであった。さらに，同時に20ヶ所以上が機能していた工房群や，10棟前後が併存していた倉庫群，さらには首長の住まいかと推測される布掘建物などのありかかたから，少なくとも200～300人の人口を想定した。そうだとすれば，それらの人びとが居住していた竪穴住居は，未調査区に広範に拡がっていたことを予想せざるを得ない。

このような非農耕的な色彩を濃厚にもった集落，ただの工房群ではない集落をどう見るのか。第5章で述べたように，＜政治的･経済的･宗教的センター機能が一ヶ所に集められ，それらを担った人びとが集住した場＞を都市と概念づけるならば，塩津丘陵遺跡群はまさしくそれに該当する。弥生時代後期後半～末ごろの山陰地域の一角を占めた，弥生都市とみなしうるのだが，そこで発揮されたセンター機能がどの程度の範囲まで覆っていたのかという問題は，地域社会の動態と関連してこれからの課題である。

さて，弥生時代の集落研究に，地域社会の再生産システムと他のそれとの相関性のなかから，＜人間とは何か，社会とは何か＞といった根源的な問いに，歴史的方法にもとづいた解を与えるという方向性がもっとなされれば，日本考古学にも豊かな稔りが訪れるであろう。小稿はそのような試行であろうとした弥生集落論であるが，そのとき人びとの意志と欲望を視野におさめるとともに，首長の役割がどの程度のものなのか，も考察していかねばならない。食料増産や祭祀などの共同体内職務と，交易や戦争の共同体間職務が，首長に課せられていたと考えられるが，不断に共同体を再生産させていくためには，多数の人びとの利害を調整しなければいけない。そのための権力行使，いいかえれば秩序を維持していくための政治も，明らかにされねばならない。

これまではともすれば，生産力の発達とそれにともなう生産関係の変更が社会を発展させた，

というような考え方が支配的であった。そのときの生産とは，水田稲作にほぼ等値されていたし，弥生時代の集落といえば農耕集落とほぼ同義であった。社会の階級化や国家形成もそれと密接不分離の関係にあった。しかし，塩津丘陵遺跡群で提起されたのは，分業と交易に照射する視座と方法の有効性ではなかったか。そのような方向性をもったほうが，弥生社会の特質が明らかになっていくように思われる。

付記　塩津丘陵遺跡群については丹羽野裕氏から詳しい教示を得たし，図の作成には賀来孝代氏の援助があった。記して感謝の意を表すものである。なお，掲載した図１～７は，『塩津丘陵遺跡群』から転載した（一部改変）。ただし，鉄器・碧玉片・砥石などの遺物の出土地点は煩雑になるため省いてある。詳細は報告書に拠っていただきたい。

参考文献

池上曽根遺跡史跡指定20周年記念事業実行委員会編 1996『弥生の環濠都市と巨大神殿』
都出比呂志 1998「弥生環濠集落は都市にあらず」広瀬和雄編『都市と神殿の誕生』新人物往来社
丹羽野裕・梅木茂雄・守岡利恵編 1998『塩津丘陵遺跡群（塩津山遺跡・竹ヶ崎遺跡・柳遺跡・附亀ノ尾古墳）』島根県教育委員会
広瀬和雄 1998「弥生都市の成立」『考古学研究』第45巻第3号
広瀬和雄 2008「古代観の転換に向けての一考察」『日本史の方法』Ⅶ

（国立歴史民俗博物館研究部考古研究系）

（2008年10月31日受理，2008年12月5日審査終了）

Bulletin of the National Museum of Japanese History
Vol. 149 March 2009

A Yayoi Urban Center in San'in : A Large Non-Agricultural Settlement in Eastern Izumo

HIROSE Kazuo

A complex of large buildings dating from the end of Late Yayoi has been found at the Shiotsu Hill Site complex with its vista of vessels plying Lake Nakaumi. The arrangement of buildings which are different in character includes a nunobori (trench foundations) building thought to be a chief's dwelling, storehouses with raised floors where various types of products were stored, a "workshop" for producing handcrafts, and pit dwellings. The more than 30 storehouses with raised floors (over a dozen storehouses existed at any one time) encircling the nunobori building on the top of the hill, more than 70 work benches made in the shape of tiered stands – tools, unfinished items, furnace walls and forged fragments have been excavated from 17 sites – are not usually seen in agricultural settlements. At the very least it appears that iron implements were forged and items were made from jasper at this site, and judging from the large volume of output there can be no doubt that the products were supplied over a wide area. It is also certain that this was a large production and trading center for making wares and crafts exchanged for such items.

There is no flat land suitable for wet rice cultivation nearby, and a cluster of large tombs for chiefs – an ideological and religious center that symbolized a consciousness of group belonging in the area from east Izumo to west Hoki – were built in the adjoining hillsides in the same period. What is more, in terms of the settlement's beginning and demise within a short period of time, it is easy to conclude that the political will of regional chiefs who were brought together at the Arashima mound tombs played a part in the formation of this non-agricultural settlement. The author views the "gathering of political, economic and religious functions in one place and the place where the people responsible for such activities lived" as an urban center. Although this urban center did not continue for as long as other Yayoi urban centers, the Shiotsu Hill archaeological site complex indeed falls under this category.

Key words : nunobori (trench foundations) building, storehouse with raised floor, work benche, making wares and crafts, non-agricultural, Yayoi urban center